

アドミッション専門人材について学ぶ教養科目の開講とその成果 ——履修者が授業の演習として入試広報活動に参加することの効果——

平井 佑樹, 一之瀬 博 (信州大学)

信州大学では、学部1年生を対象とした教養系の共通教育科目として「高大接続におけるデータサイエンスゼミ」を2022年度の前・後期に開講した。この科目では、データサイエンスに関する1つの実践例として、アドミッション専門人材が行う業務を学ぶ。科目の後半で実施する演習では、担当教員が与えるデータに基づき、履修者が信州大学の魅力を高校生などに発信する。前期では履修者がオープンキャンパスにおいて魅力を伝えるプレゼンテーションを行い、後期では履修者が制作した動画を春のWebオープンキャンパスで上映した。前期開講科目では、開講した成果が顕著に現れ、オープンキャンパスにおける参加者の評価および履修者の授業評価どちらにおいても高い評価が得られた。

キーワード：入学後の教育、入試広報、教職学協働、オープンキャンパス

1 はじめに

新型コロナウイルス (COVID-19) が入試広報活動に大きな影響を与えている中、信州大学 (以下、本学) では、アドミッションセンター主催の「ミニオープンキャンパス in 松本 (以下、ミニ OC)」を複数回開催した (一之瀬ほか, 2022)。従来のオープンキャンパスとは異なり、参加可能人数を定めるなど、規模を縮小した上で開催した。結果として、2020年度は20回、2021年度は16回 (この16回のうち4回はオンライン開催) 開催したものの、本学在学生の参加はなく、すべてのプログラムを教職員のみで実施した。そのため、参加者アンケートでは「学生の話も聞きたかった」「学生と話がしたかった」など、在学生の参加を求める意見が多数寄せられた。

学生が参加する入試広報活動については、喜村ほか (2020) が述べるように、「大学の広報担当者では思いつかないような新たな広報内容が創出される」などの良い効果がある。本学における従来のオープンキャンパスでは、在学主導のキャンパス見学ツアーなどが実施されていたこともあり、ミニ OC においても在学学生が参加するプログラムの企画を考案することとなった。しかしながら、前述のとおり、ミニ OC は1年間に20回程度開催 (1回あたり約2時間で10日間程度かけて開催) するため、すべての回に同じ在学学生を参加させるというわけにはいかず、そうでなかったとしても、参加する在学生の募集や参加する日程の調整などがうまくいかないことが予想された。

そのため、本稿の著者が担当する科目 (以下、本科目) での演習として、履修者もミニ OC に参加する企画を考案し、2022年度に実施した。本稿では、その

科目を開講するまでの経緯、科目の内容、および開講したことの成果について報告する。

2 科目設計

ミニ OC に参加する在学学生を集めるためだけに本科目を開講するのでは大学で開講する科目として成立しない。そのため、本学の特徴に合わせて、科目として成立させるための設計を行った。

2.1 科目概要

本学で開講される科目は、所属学部・学科などに関係なく受講できる共通教育科目と、所属学部・学科に応じた専門科目の大きく2つに分かれている。多種多様な背景を持つ学生を集められる可能性が高いことから、本科目は共通教育科目として開講することとし、演習を中心とした授業を展開できるゼミ形式の科目を設計した。ゼミ形式の科目は、原則選択科目であり、クラスサイズが30名程度に制限されているため、すべての学部の履修者が揃わない可能性があった。しかし、少人数クラスのため、担当教員が履修者を綿密に指導することが可能であった。

内容面については、データサイエンスに関する1つの実践例として取り扱うこととした。アドミッション専門人材が行う大学入試関係の研究や業務では、「データを処理・分析し、データから有益な情報を取り出す方法論 (北川ほか, 2021)」であるデータサイエンスに関わる活動を行っており、それを体験的に学ぶことができるようにした。本学では、2023年度に「数理・データサイエンス・AI教育プログラム (文部科学省、

2023)」におけるリテラシーレベルの認定を受けるための準備を行っていたこともあり、数理・データサイエンス・AI教育強化拠点コンソーシアム（2020）が定めるモデルカリキュラム（リテラシーレベル）の「選択」分野を扱う科目として設定した。

2.2 2022 年度前期開講科目の詳細

表1は前期開講科目のシラバス（2022a）の概要を示したものである。前期では、最終目標（達成目標）をオープンキャンパスにおける魅力発信とした。履修者が、魅力を発信するための知識や技能を第7回までに身につけ、第8回以降で魅力を発信するためのプレゼンテーションの準備やリハーサルを行い、オープンキャンパスにて演習を行う流れとした。ただし、シラバスで示した授業計画は、履修者と相談した上で変更しており、実際は次のとおり実施した。

- ・ 第2～7回：各論
- ・ 第8回：入試広報活動に関する招待講演
- ・ 第9～10回：オープンキャンパスでの発表準備
- ・ 第11～13回：発表リハーサル
- ・ 第14～15回（集中開講）：オープンキャンパス運営補助＋発表、授業アンケート

この変更は、各論の後に招待講演（本学アドミッションセンター教員による入試広報活動の紹介）を入れ、発表リハーサルを3回に渡って実施することにしたためである。シラバスでは4週間かけてオープンキャンパスでの発表準備を行う計画としていたため、第10回と第11回の上に2週間の休講期間を設けた。

知識や技能を身につける第7回までにおいては、まず、入試関連書籍（たとえば（倉元, 2020））にある記述を適宜引用した上で、「アドミッション専門人材とはどのようなことを行う人なのか」について第2回で定義し、大学入試関係の研究や業務を一通り紹介した上で、最後に講義内容希望調査を行った。第3回から第7回にかけて、次の5つのテーマを設定し、希望調査結果に基づく授業を展開した。

- ・ 入試運営①（概要）
- ・ 入試運営②（各論）
- ・ 合格・入学者サポート
- ・ 追跡調査①（志願者動向）
- ・ 追跡調査②（入学後の状況）

各回の授業では、履修者に公開できる範囲で本学の入試データを示し、入試や広報活動の実施に至るまでの検討内容や入試結果を検討するための方法などについて講義した。ここでは、いわゆる新入試（2021年度入試）に向けて本学が実際に検討してきた内容や、

表1 前期開講科目のシラバス（2022a を一部改変）

達成目標	担当教員から提供されたデータを適切に分析し、その結果を活用して本学の魅力を発信することができる。
授業計画	<p>【第1～7回：前期・後期開講科目共通】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 第1回：ガイダンス ・ 第2～7回：各論（順不同） <ul style="list-style-type: none"> - 大学入学者選抜研究（分野や論文紹介） - 大学入試に関する広報 - 大学入学前教育・初年次教育 - 入試結果の分析 - 追跡調査 - その他、受講者の希望に応じた話題 <p>【第8回以降：前期開講科目限定】</p> <p>本学の魅力を発信する演習として、本学オープンキャンパスにおける広報活動を行う。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 第8～11回：グルーピング（3～4名）、オープンキャンパスでの発表準備（提供データの分析活動を含む） ・ 第12回：発表リハーサル ・ 第13回～第15回（集中開講、参加日や発表方法などは別途調整）：オープンキャンパス運営補助＋発表、授業アンケート
成績評価方法	<p>【第2～7回：50点満点】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 各回リアクションペーパーの提出（各回5点×6回） ・ 高大接続や本学の魅力に関する考察レポート（20点） <p>【第8回以降：50点満点】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ リハーサル時点のオープンキャンパスでの発表内容15点：グループとしての評価（学生相互評価＋担当教員による評価） ・ 発表内容の批評5点：批評したことに対する評価 ・ 活動レポート30点：発表 or 動画制作の経緯の説明、自身の貢献の説明、反省点、本授業で学んだことの記述など

入試広報について検討するために導入したシステム（インターネット出願時アンケートなど）について話すなど、本稿の著者らが実際に行ってきたことについて、その概略を解説した。

講義の後、簡単なグループワークを実施した。グループワークでは、次の4点のようなオープンエンドな問いを設定し、グループとしての回答をクラス全体に共有し、担当教員からフィードバックした。

- ・ 学生（生徒）に響く信大の魅力は何か。
- ・ 合格発表から前期に履修する科目が決定するまでの期間において、本学高大接続の課題は何か。
- ・ 本学入試の良い点や改善点は何か。

- ・ (架空の3名の受験生に関する高校での活動内容を示した上で)「主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度」が良い順に並べよ。

その後、表1の成績評価方法で示したりアクションペーパーを用いて、各問いに対する各履修者の意見を改めて収集し、必要に応じて本学の担当部局(学務部入試課や学務部学務課共通教育支援室)に、匿名化した上で送付した。

第8回の招待講演が終わった後、科目前半のまとめとして、高大接続や本学の魅力に関する考察レポートを課した。具体的には本学の大学案内を高校生やその関係者が見た場合の良い点や改善点について論述する課題を出した。大学案内は必ずしも高校生向けに作られているとは限らない。しかし、各種進学相談会や大学説明会では大学案内のみ配布することもあるため、このような課題を設定した。

以上のように、科目前半において、本学の魅力を改めて確認し、本学をこれから受験する高校生などに向けてどのようなメッセージを出せばよいかについて検討を行った後、第9回以降の発表準備を進めた。履修者29名をミニOCの参加希望日を聞いた上で8グループに分け、発表内容について次の6つの条件を提示した。

- ・ 発表時間は質疑応答も含めて25分程度とする(目安:発表20分, 質疑5分)。
- ・ グループで1つのプレゼンテーションを実施することを標準とする。各人のプレゼンテーションを合わせたものでも良い。
- ・ Microsoft PowerPointを用いた発表を標準とする。収録した音声や動画の利用も可能であり、担当教員をコーディネータとするパネルディスカッション形式でも良い。参加者に問いかけることも可能である。
- ・ 参加者に事前に資料を配布することができる。
- ・ 発表内容は、教職員が行う大学概要説明や学生生活説明と重複しないことが望ましい。
- ・ 自身の想いを正直に伝えて良い。ただし、リハーサルを見て内容の変更を依頼することがある。

また、発表内容を決めるための参考として、本学アドミッションセンターから「次の7点のような内容(取捨選択自由)を含めたプレゼンテーションにすると良いのではないか」という助言を行った。

- ・ (長野県外出身の場合)実際に長野県に来てみてどんな感じか。
- ・ 実際に大学生になって感じたことは何か。
- ・ 1人暮らしはどんな感じか。私の1週間みたいな

ものでも面白そう。

- ・ 大学を選ぶときに困ったことは何か。それをどのように解決したか。
- ・ 高校時代にやっておけば良かったと感じていることは何か。
- ・ 今年度の大学入学共通テストは過去最低の平均点になったがメンタルを含めてどのように対処したか。効果があった取り組みはあるか。
- ・ 保護者の方が付き添っている場合が多いので、実際に親元を離れるときにどんな会話が合ったか。保護者へのアドバイスはあるか。

このように、教職員による説明との重複を避けつつも、自分の想いを正直に伝えて良いという指示を出した。これは、ミニOCの参加者にとっては同じ内容よりも異なる内容を聞いた方が良いであろうという判断があったことや、永田(2011)が述べるように、教員・職員・学生の役割を意識したためである。

2.3 2022年度後期開講科目の詳細

後期開講科目のシラバス(2022b)は前期と比較して後半のみが異なり、第8回以降を、本学の魅力を発信する動画やポスターの制作に充てた。動画制作の期間や負荷を考慮して、動画の長さは10分程度のものとし、学内のキャンパス見学ツアーを収録する場合は20分程度になっても良いこととした。また、動画の内容を説明あるいは補足する資料としてポスターの制作も依頼した。動画は大学説明会などで上映する可能性があること、ポスターは本学アドミッションセンター教員が高校訪問などをしている際に配布する可能性があることを伝えた。

動画・ポスター制作においては、ミニOCにおけるアンケート結果を踏まえ、履修者30名を次の3条件を満たすように5グループに分けた。

- ・ 各グループに男性・女性がそれぞれ2名以上いる(前期では、男性/女性のみで学生グループがあり、そのグループがミニOCで発表した際のアンケートには、女性/男性学生の意見も聞いたかったという回答があった)。
 - ・ 各グループに長野県内・県外出身者がそれぞれ2名以上いる。
 - ・ 各グループに在松・離松生がそれぞれ2名以上いる(「離松」は教育・工・農・繊維学部を指し、学部2年になると松本キャンパスを離れて生活する学部である。その他の学部は「在松」である)。
- 本科目の進行とは別に、本学アドミッションセンターでは、2023年3月末頃に新高1・2生を対象とし

た Web オープンキャンパス（以下、春の WebOC）を新たに実施する計画をしていた。そのため、最終的には、本科目で制作した動画をその場で上映することとなった。

3 本科目開講の成果

3.1 2022 年度ミニ OC

2022 年度ミニ OC は 7 月下旬から 8 月下旬の間に、8 日間かけて 16 回実施した。表 2 にその概要を示す。当初はすべての回を対面で実施する予定であったが、新型コロナウイルス感染拡大の影響で、8 月に行われた計 14 回はオンラインでの実施となった。プログラムは対面・オンラインどちらも同じである。前期開講科目において編成した 8 グループそれぞれが 1 日間（午前・午後の計 2 回）担当し、対面開催時は座席への誘導などの業務も行った。参加日と参加学生（全員が学部 1 年生）の所属学部は次のとおりである。

- ・ 7 月 24 日（日）：教育，教育，教育，経法
- ・ 8 月 5 日（金）：人文，教育，経法，理
- ・ 8 月 6 日（土）：人文，医（医学科），工，工
- ・ 8 月 9 日（火）：人文，医（医学科），工，工
- ・ 8 月 18 日（木）：教育，医（保健学科）
- ・ 8 月 19 日（金）：教育，教育，工，繊維
- ・ 8 月 27 日（土）：人文，医（医学科），工，工
- ・ 8 月 28 日（日）：教育，工，工

図 1 に示すように、学生によるプレゼンテーションでは、教職員による説明では含まれないような内容の説明が多くあった。また、図 2 に示す質疑応答時間では、プレゼンテーションには含まれない学生自身の想いも聞くことができた。オンライン開催では Web 会議ツール（Zoom）の操作に手間取る場面があったものの、対面開催時と同様に学生の声に参加者に届けることができた。参加者は Zoom における表示名をハンドルネームにして良かったということもあり、質疑応答では対面開催時よりも盛り上がった。

参加者アンケートでは、質疑応答を除く各プログラムとミニ OC 全体について、「とても良かった」～「どちらでもない」～「良くなかった」の 5 段階で評価するよう依頼した。同伴者を除く参加者 1,015 名のうち 730 名から回答が得られ、回答率は 71.9% であった。アンケート回答内容を公開することができないため、具体的な数値を本稿で示すことができないものの、全体として概ね良い評価が得られ、特に「とても良かった」の回答割合は、学生による魅力紹介が最も高かった。

表 2 2022 年度ミニ OC の概要

	対面開催 (2 回実施)	オンライン開催 (14 回実施)
参加定員	各回 150 名	
総申込者数	287 名 (161 名)	2,068 名 (1,324 名)
総参加者数	239 名 (136 名)	1,360 名 (879 名)
プログラム	・ 大学概要説明，学生生活説明 ・ 令和 5 年度入試概要説明 ・ 学生による信州大学の魅力紹介 ・ 質疑応答	

注) 参加者は参加したことをシステムに記録した者、総申込者数および総参加者数の括弧内は同伴者を除いた人数で内数



図 1 ミニ OC の様子（対面開催時の学生発表）



図 2 ミニ OC の様子（対面開催時の質疑応答）

3.2 春の WebOC

後期開講科目における動画・ポスター制作が進んでいる間に、新高 1・2 生を対象とした春の WebOC を開催することが決まった。表 3 にその概要を示す。春の WebOC は、志望大学決定時期の早期化が進んでいる中で、少しでも早く大学のことを知ってもらう目的で企画したものであり、2022 年度は試行的に実施した。2023 年 3 月 26 日（日）および 4 月 2 日（日）の 2 日間で計 4 回開催し、いずれもオンラインで実施した。急遽開催が決まったということもあり、本科目の履修者が参加することはなかったものの、後期の履修者が制作した動画を上映することで学生の声が届けるようにした。後期開講科目では、動画が 5 本制作

(各グループで1本制作)され、そのうち、本学全体や長野県について紹介している動画1本と、本学の魅力が良く伝わる動画1本を著者らが選択し、それぞれ春のWebOC各回の前半と後半で上映した。

春のWebOC終了後、ミニOCと同様に参加者アンケートを実施し、参加者252名中134名から回答が得られた(回答率53.2%)。全体としてミニOCと同様の評価が得られたものの、動画上映のみとなった「信州大学へようこそ」と「学生による魅力紹介」では、「とても良かった」の回答割合が他と比べると低い結果となった。この結果は、動画の内容や質で変わる可能性があるものの、さらに良い評価を得るためには在学生の参加が必要であることを改めて認識した。

3.3 授業としての評価

本学では、開講されているほぼすべての科目において、各科目の最終回(15回の授業で構成される科目ならば第15回)で授業アンケートを実施することが求められている。質問項目は共通であり、各科目で設定した達成目標に到達したか、また、授業を通して達成感が得られたかなど、授業全体を振り返るための項目が設定されている。担当教員に対する評価を行う質問項目もあり、授業に対する意見・要望などを回答することもできる。共通教育科目におけるゼミ形式の科目では、独自項目としてさらに、コミュニケーション力が身についたか、また、論理構成力が身についたかを聞いている。

前期・後期開講科目で実施した授業アンケート結果の一部を、それぞれ表4および表5に示す。いずれの項目でも「そう思う」側の回答が多く、科目全体として大きな問題は見られなかった。「そう思う」の強さという観点で見ると、実際に行われたイベントに参加している前期のほうが強く出ていることが窺える。

本学全学教育センターでは、授業アンケートとは別に、すべての共通教育科目の中から、優れた実践を「共通教育グッドプラクティス」として毎年選定しており、前期開講科目はこれに選定された(<https://www.shinshu-u.ac.jp/faculty/general/credit/>)。選定の根拠となる学生(履修者)の投票結果では、次の6点のような投票理由が示されていた。

- ・ 自分たちが受けた入試の裏側を知ることができるから。
- ・ 他の受講者と意見交換する機会が多く、自分にはなかった視点から物事を考えるきっかけになっていると感じたから。
- ・ グループワークで出た意見を大学側に伝えてくれ、

表3 春のWebOCの概要

参加定員	各回 250名 (4回実施)
総申込者数	308名
総参加者数	252名
プログラム	<ul style="list-style-type: none"> ・ 大学では何をやるの? ・ 信州大学へようこそ (動画) ・ 信州大学ってどんなところ? ・ 学生による信大の魅力紹介 (動画) ・ 質疑応答

注) 参加者は参加したことをシステムに記録した者

表4 前期開講科目でのアンケート結果 (N = 28)

	強く そう思う	そう思う
授業目標に到達したか	50%	46%
授業を通して達成感を得たか	64%	32%
教員は、熱意・意欲をもって授業を行っていたか	89%	11%
コミュニケーション力は身についたか	46%	43%
論理構成力は身についたか	29%	57%

注) 5段階評価のうち「そう思う」側の回答を抽出

表5 後期開講科目でのアンケート結果 (N = 29)

	強く そう思う	そう思う
授業目標に到達したか	31%	66%
授業を通して達成感を得たか	59%	38%
教員は、熱意・意欲をもって授業を行っていたか	69%	28%
コミュニケーション力は身についたか	38%	52%
論理構成力は身についたか	31%	66%

注) 5段階評価のうち「そう思う」側の回答を抽出

今後に活かそうとしてくれていることが分かるから。

- ・ 他の授業では経験できない、受験生での前での発表や相談会など、たくさんの豊かな経験ができると思ったから。
 - ・ データの実践的な読み取り方や大学入試関係のあまり語られないことについて学ぶことが出来る。
 - ・ フィードバックがしっかりしていてやりやすい。
- 以上から、大学で開講する科目としても、履修者がミニOCに参加する企画は成功だったと考えられる。

4 おわりに

本稿では、著者が担当する科目「高大接続におけるデータサイエンスゼミ」の内容と開講したことの成果について報告した。3節で示した分析結果のとおり、

前期開講科目では開講した成果が顕著に現れ、オープンキャンパスにおける参加者の評価および履修者の授業評価どちらにおいても高い評価が得られた。本稿の第一著者が2022年4月まで本学アドミッションセンターに所属していたこともあり、同センターと緊密に連携できたことも成功の一要因であると考えている。

2022年度は開講初年度ということもあり、途中で授業計画を変更するなど、手探り感が否めなかった。しかし、本学で開講する科目として成立したことから2023年度も継続して開講している。2023年度ミニOCでは、対面開催とオンライン開催の両方を実施している。そのため、どちらの形式にも参加するよう履修者へ指導しており、両形式のメリットやデメリットを考察させている。

本科目の開講を継続することで、履修者が2年、3年と進級した後も、ミニOCや春のWebOCへの参加を呼びかけることも可能になる。2023年度のミニOC(対面開催)では、2022年度後期の履修生2名が学生スタッフとして参加したため、参加者にとっては多くの学生と話をする機会が得られた。このような形で在学学生を主体とした教職学協働を続けていくことにより、大学全体が一体となって活動していることをアピールすることができる。本学の全学教育センターおよびアドミッションセンターでは、引き続き本企画に関する連携を行い、高校生やその関係者、また本学在学学生いずれにおいても、より良い効果が表れるように改善を続けていきたい。

本科目の内容について、2.2節で述べたように、履修者に公開できる範囲のデータのみ提供し講義しているため、たとえば「入試データの分析とそれに基づく広報戦略の立案」のような戦略部分については十分に講義できているとは言えない。データに基づく戦略立案は、アドミッション専門人材が行う業務として重要な項目であり、かつ、本科目はデータサイエンスを扱っている科目であることを考慮すると、今後は、2.2節で述べたようなアクションペーパーを通じた意見聴取だけでなく、たとえば広報戦略の立案を行っている教職員と履修者がディスカッションを行うなど、より実践的な取り組みを、科目の内容に組み込むことも検討していきたい。

参考文献

- 一之瀬博・木村建・海尻賢二・平井佑樹(2022)。「コロナ禍における信州大学アドミッションセンターの入試広報活動」『大学入試研究ジャーナル』32, 150 - 156.
- 喜村仁詞・大塚智子(2020)。「学生が創る学生募集広報一理

論検証型手法から理論成績型手法への転換」『大学入試研究ジャーナル』30, 66 - 73.

北川源四郎・竹村彰通(編)(2021)。「教養としてのデータサイエンス」講談社.

倉元直樹(編)(2020)。「『大学入試学』の誕生」金子書房.

文部科学省(2023)。「数理・データサイエンス・AI教育プログラム認定制度(リテラシーレベル)」文部科学省
https://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/suuri_datascience_ai/00002.htm (2023年4月10日).

永田純一(2011)。「在学生による入試広報活動の取り組み—広報効果と人材育成の観点から」『大学入試研究ジャーナル』21, 91 - 96.

信州大学(2022a)。「高大接続におけるデータサイエンスゼミ(前期)シラバス」信州大学
<https://campus-3.shinshu-u.ac.jp/syllabusj/Display?NENDO=2022&BUKYOKU=G&CODE=G2B55721> (2023年4月10日).

信州大学(2022b)。「高大接続におけるデータサイエンスゼミ(後期)シラバス」信州大学
<https://campus-3.shinshu-u.ac.jp/syllabusj/Display?NENDO=2022&BUKYOKU=G&CODE=G2B55722> (2023年4月10日).

数理・データサイエンス・AI教育強化拠点コンソーシアム(2020)。「数理・データサイエンス・AI(リテラシーレベル)モデルカリキュラム～データ思考の涵養～」数理・データサイエンス・AI教育強化拠点コンソーシアム
http://www.mi.u-tokyo.ac.jp/consortium/model_literacy.html (2023年4月10日).